



◆今号の内容◆

- ・ 巻頭言: CODEとの10年  
～コープこうべにとっての10年
- ・ CODE救援の歩み
- ・ 救援プロジェクト進捗状況
- ・ イベント案内
- ・ 役員・スタッフ活動記録
- ・ 会員・寄付者紹介
- ・ 賛助会員募集・ご寄付のお願い

# CODE Letter

**2012.12.3 VOL.45**

(特活)CODE海外災害援助市民センター 発行  
〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10  
TEL: 078-578-7744 FAX: 078-574-0702  
E-mail: info@code-jp.org  
URL: <http://www.code-jp.org/>  
郵便振替: 00930-0-330579

## CODEとの10年～コープこうべにとってのCODE

コープこうべには、「コープこうべ災害緊急支援基金」という枠組みがあります。この基金は1999年に設立されたもので、その背景には国内外の災害を“我がこと”と感じ“何とか応援したい”という組合員の熱い思いがありました。それ以前も、大規模な災害が発生するたびにコープこうべでは、組合員に緊急募金を呼びかけ被災地に寄贈するという取り組みを行ってきました。しかし、災害発生たびに呼びかける緊急募金では、集約に時間がかかり、“被災地に一刻も早く気持ちを届けたい”という組合員の声にこたえることが出来ません。そこで生まれたのがこの基金でした。

この基金のもう一つの特徴は、基金の醸成と拠出の決定を、組合員自身が行うという点です。各地区から選ばれる14人の組合員と組合員理事で運営委員会が構成され、毎年1月17日を中心に取り組み募金を呼びかけ、拠出にあたっての論議を活発に行います。拠出先と金額の決定権も運営委員会にあり、募金の使われ方や災害支援のあり方についてのより深い理解が、活動を通して組合員の中に広がってきました。そしてCODEの存在は、運営委員会を核につなぎ、コープこうべという組織の中にしっかりと浸透してきました。

馴染みが薄く未知の存在であったNPO・NGOとの初めてつながりがCODEであったことは、コープこうべの組織と組合員にとって、とても幸運であったと私はいま感じています。被災地域の苦難を“我がこと”と感じ、その国と地域の暮らしに思いを寄せ、

一人ひとりに向き合い最後のひとりまで救う・・・このCODEの志が組合員の共感を呼び、地道な取り組みが信頼を広げてきたのだと思います。また様々な学習会やイベントに足を運び、CODEのミッションと取り組みそして現地の人々の暮らしを直接組合員に伝えていただいたことも、理解を進めるうえでの大きな後押しとなりました。特に、協同組合の考え方を生かしたアフガニスタンのぶどうプロジェクトは、参加しやすくわかりやすい取り組みでCODEへの共感を広げました。また、4000万円を超える募金が寄せられた中国四川大地震では、老年活動センターが建設された光明村をコープこうべの理事と組合員が訪問し村の人々と直接触れ合う機会を得たことで、CODEとの距離がぐっと縮まりました。四川を訪問した組合員の「CODEの皆さんが本当に現地の皆さんに寄り添い誠実に支援いただいていること、私たちの募金がしっかり活用されていることを確かめてきました」という報告会での言葉は、何よりも重いものでした。

阪神淡路大震災を契機に生まれたCODEの存在は、自立した市民として互いに育ち合い協同の力でより良い暮らしと地域づくりをめざす生協の強力なパートナーであり、「KOBE」の財産でもあります。これからも組合員と共に活動を通して、共感と応援の輪を地域に広げていきたいと思っています。

山添 令子

(CODE理事/コープこうべ常勤理事)

## CODE10周年

寒さも厳しくなり、2012年が早くも終わろうとしています。2012年はCODEの誕生から10周年となる大きな節目でもありました。

CODEは1995年の阪神・淡路大震災をきっかけとして誕生した阪神大震災地元NGO救援連絡会議を前身に、2002年に設立されました。2002年にはNPO法人として再スタートしました。この17年の活動の経験を活かし、次の10年もKOBE市民の活躍の場となるため努力していきます。

今後ともみなさまからのご支援・ご協力のほどよろしくお願い致します。

## CODE救援の歩み

CODEは17年間で51回の救援を行ってきました。今号ではCODEのこれまでの救援活動一覧を紹介します。(各救援活動を支援していただいた方がおられるように、皆さんにも思い入れのある救援活動があるのではないのでしょうか?)

1995. 5. 28	サハリン大地震	救援物資
1996. 2. 3	中国雲南省地震	救援物資 学校支援
1996. 10	カンボジア大水害	コミュニティ支援
1996. 11. 6	インド南東部 ハリケーン被害	現地NGO支援
1997. 2. 28 1997. 5. 10	イラン大地震	救援物資
1995	朝鮮民主主義人民共和国 大飢饉	人道的支援 食糧支援
1998. 1. 10	中国河北省大地震	救援物資 学校支援
1998. 2. 4	アフガニスタン大地震	医療活動支援
1997夏	パプア・ニューギニア 大干ばつ	学校支援
1998. 5. 30	アフガニスタン大地震	医療活動支援
1998. 7. 17	パプア・ニューギニア 地震津波	学校支援
1998. 10	ホンジュラス ハリケーン被害	住宅建設
1999. 1. 25	コロンビア大地震	ケアセンター建設
1999. 5	ペルー水害	現地NGO支援
1999. 6. 16	メキシコ地震	地場産業支援
1999. 8. 17 1999. 11. 2	トルコ大地震	現地NGO支援
1999. 9. 21	台湾大地震	コミュニティビジネス 支援
1999. 12	ベネズエラ水害	現地NGO支援
2000. 1. 15	中国雲南省地震	学校建設
2000. 2	モザンビーク大水害	ファンド支援
2000冬	モンゴル大災害	食糧支援
2000. 8	メコンデルタ大水害	現地NGO支援 食糧物資支援

2001. 1. 13	エルサルバドル地震	現地NGO支援
2001. 1. 26	インド西部大地震	村の総合再建支援
2002	アフガニスタン	現地NGO支援 ぶどうプロジェクト
2002. 9	メキシコ・ハリケーン	地場産業支援
2002. 6. 22	イラン地震	学校建設
2003. 2. 24	中国ウイグル地震	学校建設
2003. 5. 1	トルコ・ピンギョル地震	救援活動支援
2003. 5. 21	アルジェリア地震	子ども支援
2003. 12. 26	イラン南東部地震	子ども・女性支援
2004. 4. 23	バンコク・スラム火災	現地NGO支援
2004. 12. 26	スマトラ沖地震・津波	防災共育 幼稚園再建・漁協支援
2005. 2. 22	イラン・ザランド地震	現地のNGOとの連携 女性支援
2005. 9. 11	ハリケーン・カトリーナ	現地基金や日本のNPO に直接支援
2005. 10. 8	パキスタン北部地震	現地NGO支援 施設設立・運営
2005. 10	中南米ハリケーン	地場産業支援
2006. 2. 17	フィリピン・レイテ島 沖地滑り	住宅再建プロジェクト 支援
2006. 5. 27	ジャワ島中部地震	住宅再建 水道敷設プロジェクト
2007. 11. 15	バングラディッシュ サイクロン・シドル	孤児院再建
2008. 5. 2	ミャンマー サイクロン・ナルギス	医療支援
2008. 5. 12	四川大地震	老人活動センター建設 寄添い活動
2009. 4. 6	イタリア中部地震	スタッフ派遣
2009. 9. 29, 30	サモア・西スマトラ地震	被災地支援 施設建設支援
2009. 11. 8	エルサルバドル・ ハリケーン	救援物資
2010. 1. 12	ハイチ地震	マイクロファイナンス コミュニティセンター 設立
2010. 2. 26	チリ地震	被災地間交流など (未定)
2010. 4. 14	中国・青海省地震	ヤク銀行プロジェクト
2010. 10. 26	インドネシア・ムラピ 山噴火被害	カウンターパート連携 支援活動のバックアップ
2011. 3. 11	東日本大震災	スタッフ派遣 被災地支援
2011. 10. 23	トルコ東部地震	現地で活動する NPOへの支援

## ◆ハイチ (2010年1月～)

2010年1月12日の大震災で、22万人以上の方が犠牲になりました。CODEは直後から支援を続けてきましたが、今年8月に代表の芹田とスタッフの岡本が新しいプロジェクトに向けて現地を訪問しました。これから次のようなプロジェクトを行いますので、皆様、ぜひご協力よろしくお願い致します。

### 【新たな展開】

#### 「GEDDH」農業技術学校の校舎建設

2005年よりレオガンで活動している現地NGO「GEDDH」による農業技術学校の校舎建設を支援します。GEDDHは、ハイチで36年にわたって医療活動に貢献してこられた日本人医師、シスター須藤昭子さんのもて炭焼きを始めたグループがきっかけとなり、植林や農業研修などを積極的に行ってきました。総会にはハイチ全土から300人が集まるほどのネットワークができています。より多くの人に、そして次世代に技術を伝えるために農業技術学校をつくりたいと希望していましたが、震災によって見通しが立たなくなっていました。

震災からの復興においてももちろんですが、人々が慢性的な貧困に苦しむハイチにおいて、農業は暮らしの基盤となる大切な産業です。それに加えて、毎年やってくるハリケーンの土砂災害予防のためにも植林は大きな意味があります。住民主体でこのような活動を行っているGEDDHを後押しすることは、ハイチの人々自らが、より自立した生活を築いていくのを支えることにつながります。

既に皆様からお預かりしている寄付で建設費をまかなう予定ですが、運営面においてもさらによりプロジェクトにするために、皆様、ぜひご協力よろしくお願い致します。

なお、2013年2月2日（土）のCODE10周年シンポジウムに、ハイチからのゲストとしてGEDDH事務局長のレフェルブ氏をお呼びする予定です。（同封チラシを参照願います）。1月20日（日）にはCODEのハイチプロジェクトについてご報告するセミナーも行います（本誌p.5イベント案内をご参照下さい）。



▲農業学校建設予定地



▲農業学校完成イメージ図

### 「日本ハイチ友好の家」～「日本ハイチ協会」活動拠点の確保をサポート

代表のマック・フレデリックさんは、岡山大学で学ばれ、日本の医療NGOのスタッフとしても活動経験があります。同会は、ハイチと日本の架け橋となることを目指し、2010年9月よりポルトープランスにてボランティアが日本語教室、日本文化教室などを運営してきました。これまで無料で間借りしていた学校が使えなくなり、CODEは新しい拠点を3年間支援することとなりました。

新拠点でも、各種教室のほか、子供や被災者向けの食料支援なども計画されています。また、CODEは防災・地域づくりの視点から、ここをコミュニティの人と人がつながる場として役立てていただくことを目指しています。同時に、ハイチにおける支援団体どうしがつながり、情報共有するための拠点としても存在することを期待しています。

### 孤児院支援

CODEは、被災地におけるより弱い立場の人たちへの支援として孤児院に関心を向けてきました。ハイチでは、親を亡くした子どもたちだけでなく、親が貧しくて子どもを育てられないという理由で孤児院になることがあり、孤児院に入っても教育や健康などの点で多くの課題があります。これからのハイチを築いていく子どもたちのため、貧しい孤児院へのサポートを行う他団体との情報交換・連携をすすめています。

### 【ご報告】

#### 「ACISIS」による女性向けマイクロファイナンス事業

地震直後から女性がたくましく露天で自営業を再開していたハイチで、事業資金を貸し付けることにより生計を支援するプロジェクトを行いました。カウンターパートは現地NGOのACISISです。

初回の対象は約40人。露天の服屋さん、雑貨屋さん、食堂など様々です。新しく商いを始めたり被災した元の店を再開した女性の多くは、「ローンのおかげで店を建て直せた」「収入が増えた」などと話してくれました。中には健康を害したり、家族の医療費や教育費などがかさみ、うまくいかなかった人もいます。国による保護が十分でないため、ひとたび危機が起こると衣食住さえ脅かされてしまう暮らしは、ハイチでは珍しいことではありません。この現実に向き合いながら、引き続きハイチの人の自立について、カウンターパートと一緒に考えていきたいと思えます。（岡本千明）

## ◆青海省(2010年4月～)

2010年4月14日に中国・青海省玉樹チベット自治州を襲ったM7.1の地震で約2700名の尊い命が奪われました。震災からすでに2年半が過ぎましたが、平均標高3700mの被災地では未だ多くのチベットの被災者の人々が避難キャンプでのテント生活を余儀なくされています。今年8月に現地を再訪問した時の様子を報告します。

### ◎再建

1年のうち8カ月が冬に閉ざされる被災地では、わずかな夏の期間を使って急ピッチな再建工事が行われており、もっとも甚大な被害を出した結古鎮では目を開ける事ができないほど工事のホコリが風に舞っています。結古鎮では病院、学校、博物館、寺院、一般住宅などが再建されていますが、政府の発表では約14000戸の中心部の住宅はすでに着工し、周辺の小さな町や農村、遊牧民地域でも16000戸以上がほぼ完成しています。

### ◎避難生活

玉樹チベット族自治州の中心の町、結古鎮では、町のすべてが再建工事を行っているので、数キロ郊外の寨馬場（夏にホースレースを行う草原）に出来た避難キャンプで約3万人の被災者の人々がテントで暮らしています。冬にはマイナス20℃まで冷え込む被災地では、政府によって配られたテントの中には夏用の薄いものも少なくなく、布を覆ってテントを二重にしたり、ストーブを焚くなどして防寒対策を行っています。また、町のほとんどの人が避難キャンプに住んでいるので、キャンプ入口には仮設の商店街も出来ました。生活に必要な食料、衣料品、電化製品、食堂、ネットカフェなどもあり、キャンプがそのまま町のようになっています。



▲結古鎮郊外の避難キャンプ

### ◎生業

震災前、中心部で商業に従事するわずかな人々以外の多くのチベット人たちは、「冬虫夏草」という漢方薬材の採集やヤク（牛）の飼育などで生計を立てていました。1年の収入を5月から6月の約40日間で稼ぐ人もいたそうです。震災後も同様に多くの被災者の人々は避難キャンプに子どもを置いて「冬虫夏草」の採集に出かけて行っています。今後、生活費に加えて、再建された住宅への入居など多くの現金が必要となってくる事になります。

### ◎課題

最も被害を受けた中心部、結古鎮に住んでいた被災者は、町全体の再建のために土地を政府に収用されました。よって、現在、政府によって再建されている集合住宅（80㎡）は、無償で被災者に提供され事になりました。しかし、震災前は庭もある大きな敷地で沢山の子どもや親戚たちと一緒に暮らしてきた大家族のチベット人にとって80㎡の住宅は決して十分ではありません。それ以上の住宅が必要な場合は、自己負担をしなくてはなりません。被災して仕事を失った人々には現金を得る手段はそれほど多くはありません。また、これまで一戸建てで暮らして来たチベット人にとって集合住宅に抵抗のある人々もいます。

また、周辺の遊牧民も政府による定住化政策の一環で集合住宅に居住する事になります。定住することでこれまで家畜を飼って暮らしてきた遊牧民の人々は、仕事を新たに探さなくてははいけません。復興事業によって大規模工事が行われていますが、これによって仕事を得ている被災者はほとんどいないのが現状です。

### ◎CODEのプロジェクト「ヤク銀行」

CODEでは、これまでに三度現地へ赴き、地元のNGOなどと支援について協議を行って来ました。その中でチベット人にとって必要不可欠な牛「ヤク（yak）」に注目しました。チベット人たちは、ヤクのミルクからバターやヨーグルトを作り、バター茶などの自家消費用だけではなく、それらを寺院に寄進します。そのバターは寺院の灯明となり、仏を照らします。また、ヤクの毛はロープやテントとして、皮はシートとして、糞は燃料として活用されます。そして肉は非常に美味しく多くのチベット人に好まれています。このようにヤクは捨てるどころのない非常に重要な家畜なのです。

そのヤク（雌）を被災者の人々に提供し、繁殖させ、これによって生活に必要なバターやヨーグルトを作ったり、繁殖後ヤクの毛や肉、皮を売る事で生計を立ててもらいます。繁殖後に返還されたヤク（又は、現金）を使って新たな被災者を支援していく循環型の仕組みがこの「ヤク銀行」です。

現在、玉樹チベット族自治州称多県拉布郷拉司通村（通称Lab村）で「ヤク銀行」プロジェクトを進めています。Lab村は、人口約3000人の山間部の小さな村で、住民の多くはチンクー麦の栽培とヤクやヤギの放牧の「半農半牧」で暮らしをたてています。約600年の歴史のある古刹Lab寺（創建1419年、チベット仏教ゲルク派）には500人の僧侶が修行しており、まさに寺を中心にした門前町のような所がLab村です。2010年の地震で村のほとんどの家屋や寺院の一部が被害を受けました。2年半を経た現在、村じゅうで住宅再建が行われています。

カウンターパートであるインドネシア人アーティストのAr ahmaiani Feisal（イアニ）さんは、震災後の復興の一環としてLab村に長期滞在し、Lab寺の僧侶などと協働でゴミ処理やポプラの植林などの環境問題に取り組んできました。

イアニさんのご縁で、現地ですでに「ヤク銀行」プロジェクトのために僧侶や住民、遊牧民、獣医の代表などで委員会を作りました。数回のミーティングを経て、地元の住民にとってやり易い方法や住民の自主的な運営を議論しています。Lab村の住民や僧侶、遊牧民の方々にこの「ヤク銀行」のお話

をすると皆さん、「大歓迎だ！」と喜ばれていました。

この「ヤク銀行」は、皆さんの貴重な寄付金でヤク（1頭約4000円 日本円で約6万円）を購入します。20人が1口3000円の寄付をしていただければ、1頭のヤクを購入できます。是非ともヤクの共同オーナーになってチベットの被災者の自立を応援してください。ご協力お願い致します。（吉椿雅道）



▲ヤク銀行を行うLab地域

## ◆四川省(2008年5月～)

昨年9月に完成した「光明村老年活動センター」。センターは毎日解放され、すでに高齢者を中心に使用されています。麻雀をしたり、お茶を飲んだりして村民の憩いの場になっています。センターのすぐそばにある衛生室（診療所）の彭医師が鍵の管理をして、センターの戸締りを担っています。村の書記によると今後、CODEにばかり頼るわけにもいかないの自分達で収益事業を行いたいとの話があがっています。

今後、センターの維持費を捻出する為に、そして光明村をより発展させるためにも村民による「農家楽」（郷土料理や娯楽などで農村での余暇を楽しむ施設）の運営を検討しています。現在、独居の高齢者への食事提供や農家楽運営に向けてセンターにキッチンを村民自身の負担で設置しています。CODEは、今後も村民と協議しながら復興に向けた支援を継続していきます。（吉椿雅道）

## ◆アフガニスタン(2002年～)

ぶどう農家へのマイクロファイナンス（小口融資）事業によって融資を受けた家族は延べ519世帯となり、技術も向上するなど状況は改善してきました。しかし、有力だったパキスタンへのマーケットが閉ざされてしまったことから、新たにインド市場の開拓を目指しています。これに向けて2013年2月には、アフガニスタンのカウンターパートと現地協同組合の役員と一緒に、デリーで調査を行う予定です。

## ◆インドネシア(2006年5月～)

2008年の水道敷設事業「呼び水プロジェクト」以来、住民が過疎化や貧困など集落の問題に積極的に目を向け始めたナワンガン集落。最近では、水道事業で積み立てたお金でヤギの飼育を行い、生計の足しにしています。

2008年、2010年、2011年に続き、今年も神戸学院大学「防

災・社会貢献ユニット」浅野寿夫教授の授業の一環で、学生さん9名が訪れました。学生さんたちは集落の人とすぐに打ちとけ、たくさんのインタビューを行いました。ひとつのテーマは、この地域の宝物ともいえる「ゴトンロヨン」（相互扶助）の考え方です。病人の看病から農作業、道普請、結婚式・葬式の世話まで、地域のことは自分たちで行い、また、困った人を放っておきません。都市に住みご近所づきあいもなくなった人にとっては少しいへんそうに見えるかもしれませんが、助けあいに基づく深いつながりは、地域の環境を守ることや防災にとっても大切です。日本人がそんな学びを得る一方、住民の方々は改めて集落の魅力に気付く…そんな学びあいの関係が続いています。（岡本千明）

## イベント案内・募集

### 若者ポスターセッション

#### 「海外災害支援一次世代からの提案」

「もしあなたが海外の被災地に支援を行うとしたら…。」次世代を担う若者たちに、ポスターセッションを通じて災害支援による国際協力プロジェクトを提案してもらいます。大学生や高校生など10～20代の若者2名以上のグループを対象に、参加チームを募集しています。ご希望の方は、CODE事務局までお申し込みください。それぞれ以下の日程、場所で開催いたします。作成いただいたポスターは下記2月2日のシンポジウム第3部で発表いただきます。

第1回 2012年12月1日(土)、5チームに参加していただき  
各チーム活発な議論が行われました。(終了)

第2回 日時:2013年1月19日(土)13:15～16:30  
場所:こうべまちづくり会館 3階多目的室

東北版 日時:2012年12月9日(日)15:30～18:00  
場所:東北大学片平キャンパス

参加費 無料

#### CODE10周年記念シンポジウム「寄り添いからつながりへ」

CODE設立10周年を記念して、以下の日程、会場にてシンポジウムを開催いたします。アフガニスタン、中国、ハイチからのゲストもお招きします。詳しくは同封のチラシをご参照下さい。

日時: 2013年2月2日(土)13:00～20:00

場所: 兵庫県公館

#### 青海省地震報告会—チベットの被災地から—(終了)

12月2日(日)、今ではほとんど報道されない被災地の現状とCODEのプロジェクトについてスタッフ吉椿が報告させていただきました。

#### ハイチ地震報告会 「阪神・淡路大震災とハイチ地震」

1995年1月17日の阪神・淡路大震災から18年。2010年1月12日のハイチ地震から3年。KOBEの経験を振り返り、そして、KOBEからハイチへの支援について報告します。

日時: 1月20日(日)14:00～16:00

場所: こうべまちづくり会館 6階会議室

参加費: 500円 ※なるべく事前にお申込み下さい。

## CODE寺子屋セミナー 若者編

### 「いま、若者へ伝える、17年間の救援思想」

CODE10周年を期に、次世代を担う若者と一緒にKOBEの市民の活動から学ぶ講座「いま、若者へ伝える、17年間の救援思想」を4月から月1回ペースで行っています。事務局長として救援プロジェクトをコーディネートしてきた村井雅清が、各プロジェクトにおける学びや人々との出会い、そこから得た救援思想をお話します。NGO、防災、国際協力などに興味がある若者の皆さん、お気軽にお越し下さい。

第7回 「スマトラ沖地震・津波」

日時：未定（決定次第HPとメールリングリストでご案内致します）

場所：CODE事務所

## 役員・スタッフ活動記録 2012/8/1～11/30

- 7月23日～8月6日 青海省第3次派遣(吉椿)
- 8月10日～13日 香港・生命關懷協会シンポジウムに参加(吉椿)
- 8月14日～8月25日 ハイチ現地調査(芹田代表、岡本)
- 8月30日～9月6日 インドネシア・ジャワ島現地調査(岡本、神戸学院大学浅野寿夫教授の授業に同行)
- 9月5日 名古屋円卓会議(日本福祉大学)に参加(吉椿)
- 9月10日～14日 神戸学院大学生インターン受入
- 9月11日 関西NGO協議会理事会(村井理事)
- 9月17日 CODE理事会
- 9月18日 帝塚山学院大学集中講義(吉椿)
- 9月23日 学生未来フォーラムで講師(吉椿)
- 9月27日 NGO・JICA協議会コーディネーター会議(村井理事)
- 10月1日 兵庫県立舞子高校環境防災科で講義(岡本)
- 10月11日 国際減災フォーラムに参加(吉椿、上野)
- 10月12日 神戸学院大学インドネシア事後研修(岡本)
- 10月17日 関西学院大学国際学部で講義(村井理事)
- 10月19日 NGO・JICA協議会in宮島(村井理事)
- 10月21日 第5回CODE寺子屋～若者編～
- 10月25日 関西NGO協議会理事会(村井理事)
- 10月29日 CODE理事会
- 11月5日 アジアパシフィックアライアンスシンポ(村井理事)
- 11月13日 兵庫県立大学講義(吉椿)
- 11月17日 神戸大学オープンゼミ参加(吉椿)
- 11月18日 市民防災復興シンポジウム参加(吉椿)
- 11月19日 関西学院大学講義(吉椿)
- 11月25日 第6回CODE寺子屋～若者編～
- 11月26日 関西学院大学講義(吉椿)

## ありがとうございます 2012/8/1～11/30

### 会員・寄付者ご芳名(順不同・敬称略)

#### ◆一般寄付(災害救援への寄付は除く)

中谷勇一、田中、加藤雄司、笠置りか、後藤秀夫、藤

田利子、塚本健三、本岡那智子、赤田義久、スズキタツロウ、中尾昴一、石田和子、安部美鈴、売布コープ委員会、菊田歌雄、日向真紀子、橋本成年、斉藤茂樹、小林笑佐子

#### ◆会員

##### 《正会員》

【個人/NPO/NGO】飛田雄一、明石和成、鶴飼卓、JIPPO、野崎隆一、草地とし子、村上忠孝、鐘森雅之、山崎達枝

【団体】神戸YMCA、コープこうべ

##### 《賛助会員》

【個人】川中大輔、田村エツ、黒澤晴世、福井敏朗、鶴飼卓、増田祐代、前畑美智子、兵頭晴喜、黒田達雄、岡田雅幸、飛田雄一、中山巖、上田耕蔵、井上由紀子、片岡幸壺、村上宏、武田節子、今井鎮雄、矢守克也、服部隆(自敬寺)、中村安秀、中村尚司、鈴木有、瀧川裕康、鶴飼愛子、仲江川徹、難波緑、大槻輝美、柿沼太郎、増田末知子、宇都幸子、北浦和志、加藤雄司

【団体】村井新聞店、DT&COMPANY関本

## 賛助会員募集・ご寄付のお願い

いつもCODEの活動にご支援・ご協力いただきありがとうございます。上述のように、CODEは市民が海外の被災地と支えあい、学びあう場として、皆様に支えていただきながら10年目を迎えることができました。これからの10年に向けて、今後ともみなさまの厚いご支援のほどよろしく願いいたします。

CODEの復興支援活動は、発災からの2～3年が主な実施期間となります。その間、プロジェクト費だけでなく、現地のフォローや広報・報告のために事務局での活動を維持する必要があります。ぜひ会員として継続的にご協力いただけますようお願いいたします。

これまで通りの会費やご寄付はもちろんのこと、皆様の地元での報告会や講演会の企画、開催という形でも、CODEに参加いただけます。

プロジェクト費以外の事務・管理費に役立てさせていただく「一般寄付(カンパ)」もお願いしております。既に今年も会員となつて下さった皆様、寄付を下さった皆様には重ねてのご案内となり申し訳ございません。誠にありがとうございます。引き続きどうぞよろしくお願い致します。

☆CODEに対するご意見、アドバイスを何なりとお聞かせ下さい。

E-mail、お電話、お葉書などお待ちしております。